

昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可  
 昭和三十七年五月十五日 發行 (毎月一回・十五日發行)

(通第三九四号)

次

63.9.14 親の <small>足利淨月</small> 叫び <small>南無観陀</small> ……………	井上善右エ門……………(5)
仏陀の真実……………	近角常観……………(1)
凡骨日誌抄……………	西元宗助……………(7)
一道会の記……………	榊原徳草……………(9)
遠く宿縁を慶ぶ……………	増山銀治……………(17)
念仏詩抄……………	木村無相……………(19)
法悦その折りく……………	花田正夫……………(22)

# 慈光

第三十四卷 第五号



# 仏陀の眞実

近角常観

「仏とは如何なる方である、仏の力とは如何なるものである」と尋ねられた時は、唯何のことはない。仏とは慈悲な方である。眞実の塊である。又その御力で私を救うて下さる。又常々私の汚れを照らして下されて、言うに言われぬ慰みを与えて下さる、というより外に言いようはない。世に若し仏がましまさずば、世間はたしかに暗闇である。世に若し仏がましまさずば、実に殺風景の極みであろう。私は仏を信じたために、他の人よりも勝れているとは毫も思わぬ。されど私一人としては、若しこの仏の救いに与からずば、とても今日あることが出来ぬのである。又今日生きている甲斐もなきことである。こまごまながらも世間が四方八面闇黒になつても、その中に光が輝き、如何に激しき風雨があつても、その間に言うに言われぬ暖かき御慈悲が身に浸み込む心地がする。仏の誓いも、仏の力も、ひしひしと適切に感ぜらるる。

親鸞聖人が「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、

す身となりておわしましおうて候ぞかし」とは、一言一句心に浸みて有難き教えである。全体人間が真面目に自己を省る心がないときは、精神上の問題に向つて入るべき門戸はない。そして奥深く考うれば考う程、内心の穢らわしく、底暗く、怒り易きことが分かつてくる。抑々「汝自身を知れ」との古き教えを適切に味わう程、自己は立派ではないことがわかつてくる。仏陀が我々の内心を解剖して、貪欲・瞋恚・愚痴の三毒とせられたが、実に実験上争われぬことである。我々は我々の本体が何であるか、靈魂があるかなきか、すべてわからぬが、唯自分が三毒の塊であることだけは明らかである。罪惡の塊であることは一点疑うべき余地を見出さない。仏教はこの根本に向かつて開かれたる門戸である。仏が布施即ち慈善の行をおすすめなさる。若しこの價あるものをかの人の利益のために我が与えるのじやと思つたらば、何のためにもならぬ。唯これをおしげもなく与える心持がよいのである。故に布施の行をすれば、貪欲の煩惱がなくなるのである。仏が忍辱即ち忍耐の行をおすすめなさる。自分は腹がたても先ず人をゆるしてやるのであると思つたらば、何のためにもならぬ。人をゆるしてやるのではない。腹立つことにつまらぬことを自覚するようにならなければならぬ。故に忍辱の行をすれば、瞋恚の煩惱がなくなるのである。仏が

ひとえに親鸞一人がためなりけり。さればいくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなきよ」と述懐したまひけるも、他人の事を言われたとはとても思えない。かく仏の慈悲につかまれば、光明に照らされたとして、私が決して他人に比べて立派なる行が出来るとは毫も思わない。されど、若しこの仏に遇い奉らずば如何に久しく苦しんだであろう。悩んだであろう。如何に墮落したかもしれぬ。如何に失敗したかもしれぬとは、たしかに信ずることである。「おのおの昔は弥陀のちかいをしらず。阿弥陀仏をももうさずおわしまし候いしが、釈迦弥陀の御方便にもよおされて、いま弥陀のちかいをききはじめておわします身にて候なり。もとは無明の酒に酔いふして、貪欲・瞋恚・愚痴の三毒のみこのみめしおうて候いつるに、仏の御ちかいをききはじめしより、無明の酔もようようすこしづつさめ、三毒をも、すこしづつ、このまずして、阿弥陀仏のくすりを、つねにこのみめ

善をなせよと教えられる。善そのものに執着してはいかぬ。善をなすは我々の心の無明をなくすためである。八万四千の門戸の開かれたは、八万四千の煩惱があるからである。門を叩かぬものには開かれぬ。自己が煩惱の塊であること自覚せぬものには、救済の門戸は永久に鎖されてある。親鸞聖人は実にこの人間の弱点を自覚せられたる方である。「一切の凡小、一切時中に、貪愛の心つねによく善心をけがし、瞋憎の心つねによく法財をやく。急作急修して、頭燃を払うが如くすれども、すべて雑毒雑修の善となづく。また虚偽の行となづく。眞実の業となづけざるなり」とは実に氣持の悪しき迄、我々の弱点を看破せられたように感ずる。平生心を清浄に持ちたい。人のためになることは、少しもおしげなく尽したいと思つてはいるもの、兎角、穢き心が起こり、知らず識らずの間に骨脊みをしたり、気が付かぬ間に自分という考えがまじり易い。又平生なるべく、少しでも善いことをしたいと心掛け、人に對しても頗る満足の心持になつて、そぞろに仏の恵みを喜べておる心の下に、突然として怒りの心を起して、今まで積んだ功德の法財を一時に焼き滅して、後から考えて見て、自らあきることがある。どれ程我慢をして頭に火のついたようにつとめたところで、純粹な眞実の心になれぬ。まじりものである。毒だらけである。結局虚偽(うそ)である。



諂偽（いつわり）である。人間の力で真実などはとてもと  
ても及ばぬ。善らしきものは、善を飾った偽善である。兎  
角、人間がわれは善人であるとか、清浄であるとか思うべ  
きでない。一枚皮をめくれば、腹の中はけがらわしき、汚  
き、黒き、怖るべきものが大騒動をしておるのではないか。  
「外に賢善精進の相を現するを得ざれ、中に虚仮を懐けば  
なり。貪瞋・邪偽・奸詐百端にして、悪性やめがたし、事  
蛇蝎に同じ」とは、我々に対する骨身に徹する打撃である。  
ここまでおしつまつてくれば、仏にすぎるより外はない。  
唯仏の真実を仰ぐより外はない。所謂、「一切の群生海、  
無始よりこのかた、乃至今日今時にいたるまで、穢惡汚染  
にして清浄の心なし。虚仮諂偽にして真実の心なし。ここ  
をもて、如来一切苦惱の衆生海を悲憫して、不可思議兆載  
永劫において、菩薩の行を行じたまひし時、三業の所修、  
一念一刹那も清浄ならざることなし。真実ならざることな  
し」である。実にこれが仏の仏たる点である。經文には、  
「この仏の真実をあらわして、」欲覺・瞋覺・害覺を生ぜず  
欲想・瞋想・害想を起さず」とあるが、実に我々が弱点の  
根本たる三毒の正反対に立って、清浄の行を以て酬いて下  
さるのである。我々は兎角欲心が起り勝ちであるのに、仏  
は「少欲知足」である。我々は眼に角を立て易いのに、仏  
は「和顏愛語」である。我々は麁言を吐いて自ら害し、彼

も思うまじき事をも許して、いかにも心の儘にてあるべ  
しと申し合つて候らんこそ、返す返す不便におぼえ候え。  
酔もさめぬさきになお酒を勧め、毒も消えやらぬにいよ  
いよ毒を勧めんが如し。「薬あり、毒を好め」と候うらん  
ことはあるべくも候わずとこそおぼえ候。仏の御名をも  
きき、念仏を申して久しくなりて在しまさん人々は後世  
の悪しきことを厭うしるし。この身の悪しきことをば厭  
い捨てんと思召すしるしも候うべしとこそおぼえ候え。  
はじめて仏の誓いを聞き初むる人々の、わが身の悪く心  
の悪きを思い知りて「この身のようにては何ぞ往生せん  
ずる」という人にこそ、煩惱具足したる身なれば、「我が  
心の善悪をば沙汰せず迎えたもうぞ」とは申し候え。か  
く聞きてのち仏を信ぜんと思ふ心深くなりぬるには、ま  
ことにこの身をも厭い、流転せん事も悲しみて、深く  
誓いをも信じ阿弥陀仏をも好み申しなんどする人は、「も  
とも心の儘にて悪事をも振舞いなんどせじ」と思召しあ  
わせたまわばこそ、世を厭うしるしにても候わめ。また  
往生の信心は釈迦・弥陀の御勧めによりておこるとこそ  
見えて候えば、さりとともまことの心おこらせたまいなん  
には、いかが昔の御心のままにて候うべき」と。  
と。仏のまことの心の宿りたる聖人の人格と信仰とがあり、  
ありとあらわれて、実に渴仰に堪えられぬ。

を害し、彼も此も共に害しつたつあるのに、仏は「善語を下  
したまいて自ら利し、人をも利し、人も我も俱に利するこ  
とを修習し給うた」のである。我々が三業に於ける弱点た  
る病に對して、仏は恰も適當なる薬である。我々はこの仏  
の真実なる薬を用いるより外に仕方はない。「一切の衆生  
の身口意業の所修の解行、必ず真実の中に作し給いしを  
須いよ」とは実に我々が救済の極所である。ここに至つて  
前に言いたる如く、無明の酔もようようにすこしづつさめ、  
三毒をもすこしづつ好まずして、阿弥陀仏の薬をつねに好  
みめす身にして貰うたのである。ここに至つて一点の私  
はない。全く仏陀の真実が我々の胸の中に宿つて下されて、  
言うに言われぬ樂の境界である。

かくなりたる以上は、吾人は満身感謝の情に満たされつ  
つ、出来得る限りは身も心も謹み、出来得る限りは仏陀の  
慈愛を伝え、仏陀の御心が世の中にあらわゆるようにつと  
めねばならぬ。なるべく慈善もなすべきである。経営もな  
すべきである。一分だけでも行つのが報謝である。一  
歩一歩謹むのが修養である。一刻一刻仏の真実を鏡として  
我々の罪惡を懺悔すべきである。少々長いけれど親鸞聖人  
の誠めを引きて我々の座右に具えよう。曰く、

「煩惱具足の身なればとて、心にまかせて身にもすまじ  
きことをも許し、口にも言うまじきことをも許し、意に

#### 足利浄円師著「光輪抄」より

純陀という男が釈尊に御供養を差し上げて喜んでいたら  
その御供養の中に毒なものがあつて、その御供養を受けら  
れた仏は、人々の純真な供養に会つとこれを受けねばなら  
ぬことになつていた。釈尊がその毒なものを食せられて熱  
病になられて、その原因で遂に涅槃に入られるようになった。  
純陀としては思いがけない因縁に相遇したものである。  
純陀はこれを悲しんで従来世尊からお聞きしていた仏法が  
全くわからなくなつて、この心は暗黒であると歎いている。  
これに對して釈尊は、純陀よ、法がわからなくなつたら如  
來の性を思え。仏の性は一切衆生の苦惱を取り去る慈悲心  
をもつて性として居る。純陀よ、汝の闇黒なる心は如來の  
立場から見れば、十五夜の月の如く明了である。純陀よ泣  
くな、南無純陀、南無純陀、と云うて純陀を拜んで居られ  
る光景が記されている。

仏が純陀を拜んで居られるそのお姿のままが、今の吾々  
と阿弥陀仏との間柄を仄かに感じさせるものがある。



# 親の叫び

井上 善右エ門

如来は一切の為に、常に慈父母と作りたまへり。当に知るべし、諸の衆生は皆是れ如来の子なり。世尊の大慈悲は、衆の為に苦行を修したまふこと人の鬼魅に著はされて、狂乱して所為多きが如し。(涅槃経)

去る春分の三月二十一日、長野県八ヶ岳連峰の阿弥陀岳と赤岳の間で、神戸の勤労者山岳会の若者の一行が縦走中、突如雪崩れが発生、九名が死亡、二人が行方不明の惨事が生じたことは新聞やテレビの報道で、どなたも御承知の事と思います。その行方不明の一人が私の法友田中英三氏の息女だったので。法友の英三氏は英語の教諭ですが目下「安心決定鈔」の英訳を続けておられる篤学の士です。遭難の報に接するや、直に二十一日の夜、令室と共に、遭難者の親族者達とバスにて神戸を出発現地向われまして。二十二日の朝、諏訪警察署に到着、一縷の望みを抱いて

おられたが絶望との報、現地の近くに立って、捜索作業の進捗を待たれましたが発見されぬ。胸はつまる心は焦る。午後になって日は西に傾いてくる。五時を過ぎれば作業は打切るとの事、令室はもう半狂乱であったそうです。附近に居合す人々にもかまわず、雪の山に向って「かほる出てきて：出てきて」と息女の名を呼びつづけて絶叫されたそうです。それからや、あつて日暮近く二遺体が発見されたとの報がもたらされ、諏訪警察で検死の後、対面、滂沱と落ち涙はとめようもなかったとのこと。

当年廿四才、かほるさんと言う。女子大学を卒業して、会計事務所勤務されていました。私ども同人が七祖聖教を拝読する七祖会をつくつて既に十余年、田中氏の宅で会を開くときは、かほるさんがお茶の接待役でした。大学在学中、勤労者山岳会のピラをたま／＼道で手渡され、それが動機となって山に登るようになった由、また三月二十一日の祝日が日曜であったため月曜日が連休となり。今度の

八ヶ岳登山となったそうです。あれを思い、これを思い両親には一つ一つの因縁に泣かれた心中がさこそと察しられます。現場での状況は、葬儀を終え、田中氏が挨拶に来問して下さったときお聞きしたところですが、奥さんが雪の山に向って絶叫された事を聞いたとき、私は涙をかみしめるのに懸命でした。田中氏はいよ／＼仏陀のみ教えの真実にましますことを身に泌みて、あの子が知らせてくれたと述懐されました。

雪山に向ってわが子を呼ぶ令室の絶叫を承って、私には先に挙げる「涅槃経」の句がひた／＼と思ひ出されました。親鸞聖人がこれを信巻に引用なさった御心を偲び涙した次第であります。如来の大慈悲は「人の鬼魅に著わされて、狂乱して所為多きが如し」とは何という真実をうがった言葉でありましょう。私は一種の譬喩的表現のごとく感じていたことがあります。私に誤りでありました。私どもには到底思いも及ぬ絶対真実心がこの私に呼びかけられる至心の叫びであることを思います。二河白道の西岸上より、「一心正念にして直に來れ」と招き喚びたまう叫びもまたその同じみ声でありましょう。池上栄吉先生が「お願いだから直ぐ来ておくれよ」と、言い換えられた心中もまた拝察に余るのであります。然りたゞその通りです。真実心の本質を頂戴いたさねばなりません。その親の叫びこそが、

南無阿弥陀仏の六字に結晶されているのであります。

人生には思いがけぬことが起る。他事と思っていた事がわが事となる。田中氏は今この悲痛事に遇うて、今更のごとく、人それ／＼何か悲痛な出来事を胸に抱いておられない人のない事を思うといわれる。自分は今まで余りにも無事に過ぎていた。そしてまた、とめどなく愚痴の心が湧くことをも知った。親がついていながら多くの方々に迷惑をかけたという自責の思いに苦しむ。たゞこの胸の中を癒して下さるのは南無阿弥陀仏のみである。よくまあ仏法を聞く身になっていた事であると謝し、娘は夫婦の目を開いてくれるために生れて来たのだという感懐に浸っておられました。

合掌

## お園さんの話

隣村で法縁があつたので、夜おそく一人で山道を帰っていると、すぐ前にキラッと光る狼の目があつた。お園さんは今度のがれられぬと、そこに坐ってお礼のお念仏を申していたら、前にいた狼も姿を消していた。

そこで急いで我家に帰り、お内仏にお参りして「狼でさえ相手にしてくれぬこの婆々を、あなた様ばかりは！」と御礼申していた。







# 一道会の記 (続)

榊原徳草

花田正夫先生の御話は次ぎのようでありました。  
今日は井上先生、西元先生、川畑先生、共に皆御都合悪く御欠席であります。

では暫くお話しさせて頂きます。実は昨日頃から心に浮かびますことは、宗教的同朋ということです。この問題について申上げてみたいと思います。私が岡山の高等学校の学生時代にキリスト教の内村鑑三氏の書物がありました、それによると、自分は色々な人の世話をしてきた。それによつて成功した人もあり又いつ迄たつても成功しない人もある。所が月日がたつてくると成功した人は昔起こつたこととは思ひ出したくない、又いくら世話しても成功しない人は遠ざかつてゆく、人を世話しても、良くなつても、よくならなくても離れて行く。こうした世にいつまでたつても変らない友達と一緒に聖書を読んだ友だけでいつ迄も変らない、と書いてあります。私はこれが非常に心に残つて居りました。その当時読んだ「死の勝利」という本、それには

見が違つて喧嘩しても、切つても切れない縁がある、信心の世界には喧嘩をしても解けてしまふ、同じ親を持つ兄弟にはその喧嘩のしこりが解けてしまふ、後に残らない、同じ仏に帰した者は意見が合はんでも切れない縁が結ばれるなあ、と言つて泌々と語つてくれたことがあります。これも私に非常に印象深く残つて居ります。所が八十近いこの年になつて、フト過去のことをふり返つてみると、色々な友達がありましたけれども、縁が遠ざかれば忘れてゆき、離れるとうとんじてしまふ。先日大阪の朝日新聞の文化講座に行きました時に同じ中学を出た友が五十年振りに来ていました、会つてみてもすっかり他人になつて居る。十年も手紙を出さずに居ると他人になつてしまふ。これにつけても、中学五年一緒に仲良く暮らしていた友も、五十年経つと忘れて終つて消えてしまふ。こうしたこと、今一つは岡山高等学校時代から同じ歎異鈔を読み念仏をお聞きした友は五十年たつても、今なお隣りに住んで居る感じで、それぞれ業報は違い或は医者になり学校の先生、又は実業家になり色々な方面に居ますが、いつでも隣りに住んで居るような、かと云つて別に御上手するでなく、手紙を書くくでもない。然しどんなに別れて居ようと、どんなに日がたつともいつでも隣りに居るような、心の通いがあるのであります。この時不図気付いたことは、遠ざかれば疎ん

二人の互いに愛し合う人が、同じ家に居り、同じ食事をし、同じベンチに腰かけて、公園のバラの花を見ておる、然し同じベンチに居り、家に居り同じ食事をし、同じ花を見ておるけれども、心は変わるから皆別々だ、二人は二人であり永遠に一つになれない。こういうことを書いた小説ですが、これを讀んで、成程人間は、人間が一つに合うことの難かしさという、顔が変わるやうに心が違い境遇が違う、こゝに同じものを見ながら暮しながら皆別々である。こういうことを教えられる。それと共に内村鑑三氏のいつ迄たつても変らぬ友情ということが非常に心に強く残つて居るのであります。その後、京都に参りまして、まだ学生時代に白井虎男さんという人がありました。京大の哲学科でドイツ語の非常に勝れた方で、後に甲南高校の先生に、それから阪大のドイツ語教授になられた、この人が私の所へこられて、花田さん君と僕とは性格も違い境遇も違う、だからこれから先き、意見が違つて喧嘩するかもしれない。然しどんなに意

じ忘れ去るがいつ迄も、いつ迄たつても消えない友情がある。これに驚いたのであります。こゝに宗教的同朋というもの、時を異にし処を距て、も、いつ迄も通う世界がある、このことに驚いたんであります。驚きについて宗教的同朋ということにつき非常に考え、れました。それについては清沢満之先生が「我が信念」という本に「真実の友」ということを書いて居られますが、「人と人とは、限り有る相対的縁として結ばれた間柄は有為転変してしまふ。学校友達とか趣味が同じとか色々有るが、限り有る縁や相対的縁は消えてしまふ。こゝに本当の友達は自分が絶対無限の仏力に支えられて初めてこれが出てくる。こゝゆうことが最初に書かれて居ります。絶対無限だから変ることがない、変ることなき仏力に支えられた、その仏の真実に支えられたものを心に頂いて心に満足して、一人独立独歩、立つてゆける。こゝまで来た時に、自然にさうゆう友が出てくるのだ、仏力に支えられた時のみ本当の友情が湧き出てくるのだと、こゝ書かれてあります。そして絶対に、仏の真実に満たされるが故に友達同志で済むとか済まんとかいうゆゑ、しいことが無くなつてしまふ。顔が異なり職業が環境が違つてもそれに用事は無い。これが第二番目に挙げられて居ります。第三番目には、友を求める必要が無くな



る。友を求めるとよく言いますが、求めるのは自分に何か足らんことがあるからである。自分が仏のまことによって満足して居れば、求めることは要らないのだ。

私が京都の学校を出て大連に赴任した時に、誰一人知人なしの世界に出て来ました。淋しいので友を作るのにか、り果てました、然し作った友は遊ぶにはよいが、いよいよの時には役に立ちません。そうした時に親鸞聖人の「つくべき縁あれば伴ない、離るべき縁あれば離れる」と歎異抄第六章の仰せが心に浮かびました、離合集散は因縁であると。このことが私の心に非常に深く届きました。吾々は自分が良い人と思うと別れたくない、憎い人だと顔見るもいやだ。距否したり引つ張ったり愛憎によって出てくる吾々の心であります。こうした私共に「つくべき縁有れば伴ない、離るべき縁あれば離る、」離合は因縁だと。これはどんな厭な人でも縁が尽きねば離れられない、目に容れても痛くない人でも縁が尽きればそれ迄である。このように手を放して「離合因縁」と言えるのは、聖人自身が仏の真実に満足して居られるからであります。人に求めることができるのだから「離合因縁」として、これをサラリと受取ることが無いから「離合因縁」として、これをサラリと受取ることができるのであります。人に求めることが無いから離合因縁としてサラリと受取ることができる。こういうことを大連に居って非常に教えられました。友を求めるよりも自分が

える、好意の友だと甘え易い、い、加減になって了う。返って反対してくれたことで自分の足もとを反省さ、れる。かと云って反対ばかりされると却って自分がひがんでしまふ、好意の人からも教えられ反対の人からも教えられる、両方から教えられてゆくのが念仏の世界だったということが知らされて参りました。だから善い友求める必要は無くなる。これが第三番目にあげて居られました。更に第四番目には、結局、友を選ぶとか求めるよりは、自分自身、仏の真実によって心の偶々まで、破闇満願、心の闇を払って貰う、偶々迄凡ゆる願いが満たされてゆく、これが宗教的同朋の一番根底であった、求めなくとも自ずと友ができてくる、この友こそいつ迄も変らぬ友である。こう書かれてあります。これも私にとっても本当の友に対する宗教的同朋の問題を教えてくださいました。又ヒルティの「人生論」の中に朋友という点が出ていました、「人間は元来あまり信用できないものだということを、イヤでも信じなければならぬことこそ、人生の重大な時期である」人間に生れて色々のものを信じていますが、人間は元来余り信用できないものだということを否が応でも知らされる時があります、この時こそその人が重大事、大きな分れ目に立つ時であります。これを転期として或は光りの世界に出るか闇の世界に堕ちてゆくか、これを言うて居ります。私共が人世

仏の真実によって心の偶々まで満足する、自分が道を求め道を開き、自分の心の隅々まで仏のまことに満たされた明るい生活が現れてくる。そうしてくれば縁が有れば一緒になり、縁が無ければ離れてゆく、こゝに友達問題から解放されてゆく、こゝに友達問題から解放されてゆく世界を教えられました。今もなお大連時代に一緒に念仏した友達は東京に居ろうと何処に居ろうと、いつも心は通って居ります。作った友達ではなく、そうした仲に出来た友達、お互いに努力したんでなしに自然に一致した友、心の通った友は今なお残って居ります。清沢先生が、信の朋友の世界には友を求めることは要らないのだと。求めるのは自分に足らない所があるからだ、有限のものを頼っておれば不安だから何か確かりしたものを掴みたくなる。友達を選べとよく言うが、善い悪いは自己中心で、自分に都合がよいと善友、悪いと悪友、いつも自己中心で見ているのであります。然し善いと思う人が必ず自分の為になるのか。悪いと思う人が返って自分に大きなことを教えてくれるのか、これは皆様も御経験と思いますが、私が大連から名古屋の別院へ来まして、私の方に好意を持ってくれるグループと反対のグループの二つが出来る。これに就いて始めのうちには好意を持つ友が自分に取り好い友とばかり思っていました、然しそうでなく返って反対の友の方が足もとを振りか

に処して始めは親類とか友人とかを信じていますが、何かの問題で裏切られてゆく、人間が信じられなくなる。「否が応でも其の時が来た時、その人が光りの世界に入るか闇に堕ちるか、その分れ目である」と言って居ります。こうした世の中に当って、人生に於いて真実の宝を真理を、求めてゆき、それが基盤となって求め得た友達は、いつ迄も変らぬ友達になれる。内村鑑三氏は「俱に道聞き俱に聖書を読んだ友が変らぬ友情を保てる」と言われる、ヒルティの言葉が相通じると思います、しかもそうした友は求めて得られるものでなく、神より与えられる友である。「神より与えられる友なるが故に、死んでも消えない世界がある、死んでも友情はいつ迄も続いてゆくのである。生死を越えて、死しても友人は、その友情の交流は続き死ぬことが無いから、最もよき意味に於いて永遠に続く」こう言って居ります。

私共はこれを念仏の上から味わえるのです。今も榊原先生が言われましたが、今此処に池山先生も白井先生も生きて働いていて下さると、先生は亡くなられて四十四年、白井先生も亡くなって遠ざかって参りましたが、死を超えて心の通いはずっと続いておる。これはそうした方々ばかりでなく「一人居て喜ば、二人と思ふべし、二人居て喜ば、三人と思ふべし」そこに親鸞聖人も御一緒して下さい。法然



上人の死を前にして弟子達は、「御廟を造らうと思いが、」と上人に御尋ねすると上人は、そんなもの造るな、そんな所に私は居らぬ、念仏の声のする所、どんな貧しい家であらうと其処が私の居る所である、と仰せられました。どんなに親しくして肩を交え膝を合わせていても念仏がないと他人である、いかに貧しくとも御念仏の通う所、私は毎も其処に居るのだと、こう言い残されて居られます。ここに私共の上に仏の御真実を頂く時、法然上人が居られる、親鸞聖人が呼びかけて下さる。人々が数限りなく眼に見えなくとも護りぬいて下さる。こうゆうことがヒルティーも「死を超えて友情が生れる」と言つて居られます。他山の石としてヒルティーの語も思い出されるのであります。

さてこれにつきまして清沢先生が「絶対仏力に生きる」と言われましたが、近角常観師の「信仰余瀝」の始めに「宗教的同朋」というのが出ております。近角先生が二十九才の年に大煩悶に落ち入れ念仏に入られた、その最初の文章が「宗教的同朋」であります。これについて、プリントが充分有りませんでしたので皆様全部にあげられませんでした。が、あらましを申し上げます。信仰の友達「宗教的同朋」と言うものは、利害を同じくするか趣味が同じだとか言うのではない、「真の宗教的同朋」というものは、こ

と思つていた近角先生が、自分自身が悪いのだと、こゝに、この自分の心を理解してくれる友達が有ればよいと気付き仲の良い友達の所へ飛んで帰えり、その人が非常に喜んで、君は苦しめでもい、んだ、君は真面目だから苦しむのだよと言つて慰めてくれるのだが、結局その友も私の本当の心を知らぬから慰めてくれるのだと思ひ、一晚泊つても友は本当の力にならないことが解かる。国の滋賀県へ帰えり、父と母が迎える、母が慰める、お父さんは厳しく叱る、叱られ、ば叱られる程、やさしくされ、ばされる程、自分がこんなに苦労かけているのが申訳ないと苦しむばかりに落ちたのであります。結局、悪に負けて善に克ちぬくことができない、池山先生がよく言われましたが「道成寺つろ、こが膚の脱ぎじまい」と、最後にどうしようもない自分に打ち当つて苦しまれたのであります。こうした時に友達も親も本当に力になってもらえない、又長浜病院に入つて非常に苦しまれたのであります。そうした時にフト気がついたのは、こうした自分ではどうしようもないのだが「顔の墨なら落せるが、身体中が墨だらけ、洗えば洗うほどよごれる」とルーテルが言つていたように、泥人形はどんなに洗つても泥ばかり、こんな自分はどうしようもない。これを全部理解して、どこ迄も慈悲を以つて向つて下さる人があれば自分は助かる、こう思つて居たのであります。

う書いてあります、先ず、人と人とが巡り合う、夜目遠目傘の内で、遠くで見ていると綺麗に見えるが近寄つて見るとア、バタが見える、このようになってゆきますと、「人間と人間との心の通いは五分と五分だ」と、先生は常に相対五分五分だと言われます、こつちが善く思うと向うも善く思う、こつちが彼奴と思うと相手も比奴と思う、悪く思えば悪く思われる、お互いに心に五分五分の交渉が始まる。然し相手に悪い所があつても、どこ迄も親切につき合うことができれば、相手がわしが間違つていた君を誤解していた、とこのように、悪い方の心が転ぜられてくる。善い方が強ければ善い方に感化されてゆく。然し實際生活に於いて善に克ちゆくか悪に敗れるか、これを振り返つて見る時に、近角先生自身は、人はいざ知らず自分は善に克ちぬくことができないのである。いつも悪にばかり敗れてゆく。始めの内は相手が悪いからだ、腹が立つのも自分は元来腹立ちじやないが相手があんなことを言うから腹が立つたんだと、責任を向うにさせていましたが、元来自分に腹立ちの煩惱が無ければどんなことをされても腹の立つ筈が無い、腹が立つのは心の底にいつも煩惱が生きて居るから縁にあつたと飛び出してくるのだ、だから原因は自分に有つたと、悪に敗け善に成れぬのも自分の本性である。こゝに気がついたのが二十九才の時であつた。そこで初めて、世間が悪い

少し身体が良くなつて家から通うようになられて、フト大空を仰いで、晴れ渡つた青空を見上げた時に、広大な御慈悲ということを感じられて、そこに、自分の真の朋友は仏様だつた、自分の駄目な姿、自分の全体を知りぬいて、あく迄も御見捨てないのは仏の慈悲であつたと、こゝにお氣付きになつて寺に帰られると、親類の人がきておられる、どうしたんだ、嬉しそうな顔しているんぢやないかと、びつくりされたということでありました。これが二十九才の時、仏の限り無い慈悲に気づかれた時のお姿であります。そして一生涯、一人々々にこの仏の慈悲を俱に味わいたいと、亡くなられる迄の御活動であつたのであります。「信仰余瀝」の中にも「真の朋友は阿弥陀仏である」と、そして自分はその仏様を知り乍ら、それが真の友達であると知らなかつた、この仏様が本当の友達であり、仏様によって自分の凡べてを理解して頂き隅々まで慈悲をそ、いで下さることによって自分は初めて人生の明るい世界に出ることができた。世間の友は皆利害得失によって手を取り又別れる、仏のまことに還つてゆく友達は消えることが無い、永遠の友達が見つかつてくる、その友は仏によって支えられる友であり、如來から頂く友人である。こう言つて居られます。

こうした久遠の友ということを非常に思うにつけ、先生



方の言葉を使うのであります。考えてみれば一緒にお念仏を喜び一緒に歎異鈔を読んだ友達で、こゝにも御参りしたことのある四日市の渡辺紋一さん、京大医学部も出て医師をして居りましたが、心筋硬塞で亡くなりました。その前から非常に池山先生を慕って居られました。或る朝、奥さんから電話があり、主人が御先きに御無礼せねばならなくなつたので、御礼だけ言っておいてくれ、ということでありました。で早速四日市迄飛んで参りますと「本日休業」と出ています、まだ命はあつたんだと早速病院に行くと、御息二人共医師で徹夜して点滴注射しておられる。枕元に座ると顔色も良いし「顔色も良いぢやないか」と言いますと、一と所どうしても気に入らん所がある、と言います。それで、君も医者、御息二人も医者、三人が駄目と言うなら、此の世のお別れだね、五十年続いていた友情も無情の嵐の前に壊れてしまふ、然し御念仏はまことに有難い、今此処で別れても、俱会一処、一処に会することが出来る、死の彼方迄手を取って行ける世界が御念仏によって与えられたのだ、と言いますと、渡辺さんも御念仏は有難いねと言ひ共に念仏して別れたのであります。

こゝに渡辺君は死んで何年もたちましたけれども、今なお渡辺さんは私の心に生きて友情が保たれて居ります。これは池山先生の「絶対他力と体験」の中にも書いてあります。られたその体験から、本願を信じ念仏申して居れば道は必ず開けると、これが、遺言であつて、その次ぎにお父さんを出したら御念仏申しておくれ、御念仏の中にお父さんはいつも生きて居ると、これが御遺言であつたと。御父さんも思い出したら御念仏申しておくれ、御念仏の中にいつも生きて居ると、こゝにも御念仏の中に生死を超えてつながつている心の通ひ、これが事実を以て教えて頂けると思ふのであります。私自身がこゝに仏の御真実によつて幸運の友を恵まれる、自分が造るのでない、仏様から頂く友達、共に道を求めてゆく時、仏様から頂く友達、生死を超えて友情を保つことの出来る友達、このことが最近非常に心打たれるのであります。「死の勝利」に於いて、「二人は永遠に二人である」と、こうした生死を超えた友情が永遠に続く世界は、念仏の中から与えられますことを思い出すとき、大変有難いこと、頂いて居ります。久遠の友達、御念仏の中から頂く世界、これを申上げて今日の御縁に換えさせて頂きます。

○ 以上によつて花田先生の御法話は終わりました。百人余りの会衆皆御念仏と共に仏前に合掌し、緊張の心も法雨に解かされるのであります。それから御下りの御菓子等を皆で頂いて暫く休憩となりましたが、次いで長崎の平岡さんの

したが、先生の奥様が亡くなられる時でも、又先生が大病になられた時に第二番目の奥様に、いよいよ駄目となつたときに奥様の友子さんが、「どうかどんなになつてもいい、から生きて下さい」と言われると、先生は、生きてやりたくても、命が無いじゃ仕様がな、と言われて、御念仏で確かり手を取つて、御念仏の中に確かり手を取つてゆくんだよ、これが友子奥さんに残された御言葉であります。御念仏の中に生死を超えてゆく力があるのだと。

又、白井成充先生も八十五才で亡くなられる時に、御嬢さんの明子さんに、これからの生活は御念仏で暮しなさい、御念仏申して居れば必ず道は開けるからと。この必ず道は開ける、との御言葉に私は非常に打たれるのです。先生の八十五年の生涯の中には障りも多かつたこと、存じます、その障りを御念仏一つで超えてこられたこと、体験の中から、本願を信じ念仏申して居れば必ず道は開ける、これが御遺言であつて、その次ぎに、これから御父さんと思ひ出したら御念仏申しておくれと。「必ず道は開ける」の言葉に非常に打たれるのであります。御嬢さんの明子さんに、これからの生活は御念仏で暮しなさいと、御念仏申しておれば必ず道は開けるからと、これに私は非常に打たれるのであります。先生の八十五年の生活、障り多い事が沢山有つたのでありませう、その障りを御念仏一つで超えてこ

問題提出によつて、花田先生の御話が再び始まるのであります。(未完)

### 七里和上の墓前の所感

私が京都の学校を卒えた頃、畏友榊原徳章師と共に、博多の萬行寺に詣で、七里恒順和上の墓参をいたしました。和上の著書も度々拝読して御高德をよく存じておりましたので、寺の裏にありませう墓地に誰方の案内も受けずに入りスグ見出せようと軽く考えておりました。

ところが沢山の立派なもの、巨大なものも色々ありましたが、和上の墓が何処にも見出せませんので、兎角一服してと二人でしやがんで煙草に火をつけようと思つたと、そこに小さな古びた墓碑があり、七里恒順之墓とありました。私共二人は驚きあわてて墓前に拝跪し、感慨深いものがありました。門信徒の人々の墓碑は大きく高いのにどうして有名な和上の墓はこんな小さな小さいのであらうか。遺弟の方々はどうしているのだらうか、とも思つた。

と同時に、私の眼が大きく高い墓碑にのみとらえられていたことの愚かさをいやと云う程知らされました。冷汗三斗とはこういう思いでしょうか。



# 遠く宿縁を慶ぶ

増山銀治

私は二十五才まではまじめな人間であると自分で自分を信じていたのですが、なまけ心が出て来たのでこまったのです。物事を一生懸命やってこそ、自分に対して親切なのに、なまけ心と云うものは、自分に対してすら不親切になるのです。こんな心では他人に対しても不親切であることに気がつき、それを直そうとしたがなかなかおられない。

又ある吹雪の日、私は自転車用小用の帰り病院の出口の道路で付添をしていたらしい婦人が雪よけの着るものも着ず歩いているのに出逢いました。私は「気の毒だなあ」と思って通り過ぎたのですが、後で、あの時、何故自分のオーバーを脱いで貸してあげなかったのか、自分は親切者であると思っても実行こそほんとうの親切なのに、実行の出来ない自分は落第である事に気づきました。自分の健康も何時どうなるかわからないと思ひ、一かど智慧もあると思っていたが、一寸先がわからぬ程の智慧しか無いことがわかり、今まで自分という者は、完全な人間だと思つ

ていたのが、一ツ破れ、二ツ破れ、しまいに全部〇になつてしまつたのです。  
サアそうなると、淋しくて何かを求めなくてはいられないで音楽で慰めようと思つてレコードを聞いていたのですが、一寸はよかつたのですがその内に、本当の慰めにはならなくなりました。それでは酒でも呑んで慰めようと思つたトタン「親」と云う事が頭にピンと浮かび、そんな馬鹿な事をして親に申しわけないと思ひ、それも出来ず、といつてどうする事も出来ない窮したという言葉そのものになつてしまつたのです。

その時フツと私の頭に浮かんだのは、仏と云う事でした。本堂へ行くと本尊様が安置してあるが、あれは人間の作つたものではあるが、ほんとうのものがどこかにあるように思つたのです。そこで隣の部屋におられた(大連別院)花田先生にお尋ねしたのでしようか、ないのでしようか

それに対して先生は「私も仏を探して見たが凡夫の目に見えるような小さいものでない」と云う事がわかつたから探すのをやめた」とおつしやつて外を指さされて、あそこに太陽が輝いているが、目の見えない人には太陽そのものは見えない、見えないから無いのかと云うと、そうではなくあるのだ、ただ凡夫が本当の智慧がないから、本当の仏というものがわからんでおるのだ、と聞かせていただきました。その時私の心は一変したのです。凡夫の身でありながら何もかも出来、智慧もあるように思ひ上つていたのが、ほんとうにつまらない、小さな人間であつた事をわからせていただきホッとさせていただきそれ以来私には、なくてはならない花田先生となつたのです。それより歎異抄を読む事をすすめられて熱心に拝読しました。そして次から次出て来る煩惱の処置を先生に御教を受けたり、歎異抄によつて解決させてもらつたりしました。歎異抄は人生の悩みについて要注意の箇所をチャンと立札を立てておいて下さつてあります。

私も「いずれの行も及びがたき地獄一定の身が」「ただ念仏して弥陀に助けられる」事を花田先生より教えていただき、その当時は、朝から晩までうれしくてニコニコとしておどるほどうれしかったのが、月日が立つにつれて踊躍観喜がおろそかになつて来て、さてこれはと第九章の裏門から逃げ出そうとした時、チヨツと待ちなさい。親鸞もこの不審ありつるにと私の手を持って引きとめられ、よくよ

く考えて見ようではないかと聖人に云われ、浄土へ急ぎ参りたき心なくていささか所労の事もあれば死なんずるやらんとこころぼそくおぼゆることも煩惱の所為ではないか、又天におどり地におどる程によるこべないという事も煩惱のせいではないか、その急ぎまいりたき心なきもの、又うきうきとうれしい心のおろそかになるような者の為にごそ救わにやおかれんのだという弥陀の大慈悲であるので、よろこべたり急ぎまいりたかつたならかえつてそれはおかしな話で煩惱のないのじやないかと心配になるだろうと、コンコンと聖人にお聴かせ頂き、アアさようでございましたかとひれ伏しました。このようにして弥陀の慈光に溶かされてキョトンとして生かされて生きているのが私の人生であります。合掌

## 浄土・誓願・本願

弥陀の浄土は往きたいからあるのではない。私の小さな考で「あるから往く」とかそんな浅はかな浄土とも違う。往きたいから往くの、往きたくないから往かんとかそんな勝手気儘なものとも違う。名残惜しく思つて娑婆の縁が切れる。苦悩の旧里はすて誰く安養浄土はこいしからず、どうしても死にたくない。いそぎ参りたき心なき者をことに哀れみ給うての本願ではないか、往きたいからあつたり、あるから往くとかだつたら本願でも誓願でもない、それはあたりまえだ、往きたくないものをどうにかしてとの念願それが大悲の誓願なのだ、本願なのだ。



念仏詩抄

木村無相

一大事

ナムアミダブツ

香師 香樹院徳龍師

◎ 心

香師おおせに  
墮(お)つる地獄は  
おそろしと知れども  
その地獄をこしらえる  
オノが心を知らぬ―

香師おおせに

オノが心

心ほどくやしいものはない  
心ほどしぶといワケのわからぬ  
ものはない  
心ほど心のすきにならぬもの  
はない

オノが心こそ  
一大事―

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

心ほど自由にならぬものはない  
心ほど心まよわすものはない  
心ほどガマン強く言うことをきかぬ  
ものはない  
身の毛よだつほど恐ろしきものは  
この心なり  
おさえもかかえもならぬものは

この心なり

地獄の猛火も我がムネからあら  
わる―

聞いておわすなり

仏を思えば

仏いよいよ我を

あわれとおぼしめし

はなれとうても

はなれられぬことと

なる―

この我が心のシマツにかりはてて  
下さるが如来法蔵さま  
この心のシマツがならずつけてやる  
との仰せが  
今のナムアミダブツとのこと―

その証據が

今のナムアミダブツ―

ナムアミダブツ

ナムアミダブツと

如来寸時もわれを

はなしたまわず

ああ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

如来寸時も

香師おおせに

参る我が姿は

如来見たまう

称うる念仏も

ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ

お歌



つれなきは

香師お歌に

忘れじと

おもつころも

忘られて

つれなきものは

わがころかな

つれなきは

わがころとは

知らずして

ころたのみて

ミダをたのまで

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

御歌

信心の奥は奥はと

香師お歌に

信心の

奥は奥はと

たずねれば

南無阿弥陀仏の

口にこそあれ

信心の

奥は奥はと

たずねれば

ただ念仏の

ほかにこそなし

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

## 法悦その折りく

われあしと知られた心 仏の心よ

二月号に西元様が紹介して下さった浅原才市翁の詩、深く心に銘じた。それについて思い出されるのは源左同行のことである。鳥取の畏友、故辛川忠雄さんの話に、源左と親しくしていたので、「あんたのことを京都の本屋が出版したいと云っているが……」と言うと、「めっそうな、この肉体を持つ間は、いつどうした悪い事をして手が後ろに廻るかも知れません。どうかやめにして下さい」と拝むようにして懇願したそうである。

親鸞聖人が「さるべき業縁の催せばいかなる振舞もすべし」と仰言っているのと同じ心境である。そのまま仏の心である。

又、四国の庄松同行に「先きほど牢獄から出たばかりの奴が、殊勝げに寺参りしているが、あんな者が助かるはずはないだろう」と話しかけると即座に「助かるともく、俺がでさえ助かるから」とこたえた。ここにも仏智のひら

花田正夫

めきを見る。

池山先生に「クラスの者がみんな先生を人格者と親しくでいます」と申しあげると「手を横に振られて、人様が何と批評されても、自分は自分のことを手掌を見るようによく知っている。もつとも人格者といわれるのに二通りある。一つには立派な行いの人で、今一つは無為無能でただおとなしい人を指している、この後者の資格は多分にあるが」と云われ、しばらくして「そこらそんじよの人々と自分はずこしも変っていない。ただせめて変った所と言えば、お念仏をいただいているだけだ」と加えられた。その先生が六高を辞められて、甲南高校に転任される時、「君がたはこの池山を信用してくれて歎異抄の話をよく聞いてくれたが、今度お別れする。これから聖人の仰言るように身に持つ業縁次第ではどんなあさましいことをするかも知れぬ。そうならばみんなが呆れて見捨てるだろうが、こう仰言る聖人だけはどこまでも御一緒して下さるね」と念仏微笑裡に語



られた。そして、「世間の修養者とか、道徳家には、自分の心の奥にある恐ろしい心にはいつも蓋をしてるが、念仏者はそれを怖わがらずに見ることが出来る、ありがたいことだ」とも話して下さった。

先年才市翁の故郷をたずねた読売新聞の記者が「これが翁の自画像です」と云って見せて貰うと、二本の角の生えたものであった。

断涯から落ちかかると、手にさわる木の枝や草の根にしがみついて、落ちまい／＼に懸命となる。この時、力強い人に抱かれると、はじめてその谷の底を眺めて恐ろしさに身震いする。身が安全になってそれが出来るように、如来の撰取不捨の利益を恵まれて、いずれの行も及び難い煩悩具足の凡夫は地獄一定であったと知らされるので、全く如来の知恵のたまものである。

### 人間の親切と仏の慈悲

山室軍平氏のことばに「人間の親切はバケツの水を植木に与えるようで、スグからつぽになる」とある。仏教では衆生縁の慈悲（親戚・友人・師弟等々の間の親切）を小慈小悲と名づけているが、親鸞聖人は「あわれみはくくむ心も人間の持つ力では未通らないで行き詰る」とも云われ

我々の手をとって下さるのである。かくて力強い仏の御手に導かれるのである。蓮如上人のお歌に

一人でも行かねばならぬ旅なるを

弥陀にひかれて行くぞ嬉しき

と仏の大悲を讃仰していられる。

私自身、生の保証出来ぬ大病の時、医術にも限界があり、人々の親切な声もむなしくなった時、名残りはつきぬけれど「力なくしておわる」より外ない身をことにあわれみ給う仏の慈悲ひとつをたのもしく感佩申したことである。

自分の力をもととした親切は限りがあり行き詰る。そこを見てとられての仏の御慈悲こそ、徹底した光であり力である。

### 信心の智慧

姥捨山の話にあるように、親の親切が子に徹する時、自分中心の心が破れて、智慧の眼がひらける。久遠の御親の仏の大悲のしみとおる時、仏心が凡心にとろけて、信心の智慧がひらける。明信仏智、仏智満入とも云われる。

さて聖人は、仏のおまことがとどく時、迷い児に母の呼び声がとどいて欲ぶように、大慶喜心がおこる。これを菩薩の智慧がひらけて、間違ひなく成仏出来ると確信出来る初地の菩薩、初歡喜地の徳を恵まれると云われている。



愚禿悲嘆述懐和讃には「小慈小悲も無き身にて有情利益は思うまじ」とある。

我々が自分の歩いて来た足跡をかえり見る時、まことに惨胆たるものである。今日（四月一日）は父の五十七回忌で朝から父を思い出して、自分のことばかり思つて父の身には少しもならなかった事が、パノラマの様に点滅する。聖人がわが身にかけて述べられたお言葉通りである。

私が名古屋に移り住んで間のない頃、某医師から

「自分が診療している患者で、病気の治る見込の無い人がいる。其時々々の症状に応じて処置はしているが、その患者を診るのが苦しい。」

との訴えを聞いた。そこで

「貴方御自身がそれを縁として、自身の死の解決をお求めになって下さい。永観律師は病身だったお蔭で、単なる学者にならず仏法者になれた「病もまた善知識である」と云われ、幼い子を亡くした泉式部はそれを縁として仏道を求め仏心に気づくと、「うつし世をあたにはかなき世と知れと教えて帰る子は知識なり」と詠じている。かくて生死を越える道がひらけると、不治の病人に接して行き詰らずに、最後まで医師の道を尽くし得るでしょう」

とお答えした。

仏の大慈悲心は、我々の力の限界をお見抜き下さって、

更らに菩薩の智慧が進み第八位の不動地の徳、退転することなく、又凡夫地を脱する故に凡夫の身と自覚する菩薩の徳を、弥陀仏の撰取不捨の利益によって正定聚の位に入ると等しいと讃仰されている。

なお菩薩の成仏するには永い間の修行があるが、念仏者はこの生を終るなり往生成仏させて頂ける点から、菩薩の最上位の彌勒菩薩と同じ徳を恵まれると絶讃していられる。浄土の第一祖、龍樹菩薩はこの菩薩の智慧の進む段階を華嚴経によられて十地に分けて讃えられ、その道を自分の力で進む時、とても意志の弱い者には不可能であるが、ここに弥陀仏の弘誓の船に乗せられるときとりの岸に横ざまに到達出来ると、煩惱具足の我等に勧められ、御自身もその船に乗せられているが、この有様を、聖人は念仏無碍の自道の上から以上の様に説かれているのである。



## あとがき

あらとうと青葉若葉の陽のひかり  
天地の恵み、新緑の候となりました。

皆様には御機嫌よろしくお過ごし遊ばしませうか。ながなが御心配頂いて居ります花田もおかけ様で追々恢復いたし、部屋の中をやっと歩く様になりました。この雑誌がお手許にとどきます頃には退院致しておりますようにと念願いたして居ります。そしてあやぶまれて居りました五号まで発刊する事が出来ますのは、一重に仏様の御加護のもとに諸先生方や誌友の皆様方の御念力を賜ったおかげでございます。

今私は何と御礼申し上げてよろしいやらわかりませぬ気持ちで一ばいでございます。まだ今後何事がおこりますやら知れませぬが一時は三号の頃で花田の命も慈光誌もおしまいになるかと存じた事でございます。

彼は慈光誌を自分の分身と思っております。

どうぞ皆様方の御力添え御はげましをお願い申し上げます。

○  
近角先生の御教は先生の御著「信仰の餘瀝」から頂きました。井上・西元両先生からは何時も慈光誌にお力添え頂きまことにありがたく存じて居ります。

榊原先生はこま／＼と一道会の記をお書き下さいます速達でお送り下さいましたのに、私の不馴れで気ばかりあせりましてもうすでに印刷にまわしてしまっておりまして、前号の一道会記と続け得られませんでしたことを申しわけなくも残念にも存じて居ります。

増山様は信州の山奥で土と親しみながらおよろこびの方で花田の大連時代からの信友でございます。

木村様はこの冬を御無事に越えられまして御撰養なさりながら念仏詩抄をお書き下さっています。

○  
万々の不手際をおわび申し上げますと共に何かとお気付きの点を御指導下さいませ。

定価	半年 八〇〇円 (送共) 一年 一六〇〇円 (送共)
編集・発行人	名古屋市南区駄上町二ノ八八 花田正夫
電話	八二一七〇三七番
印刷人	愛知県西加茂郡三好町大字福谷 坂部光雄
発行所	名古屋市南区駄上町二ノ八八 慈光社
振替口座	名古屋一〇四七〇番
郵便番号	四五七